

日系カナダ人のインターマリッジに関する一考察

— 仏教会における通婚パターン分析を中心に —

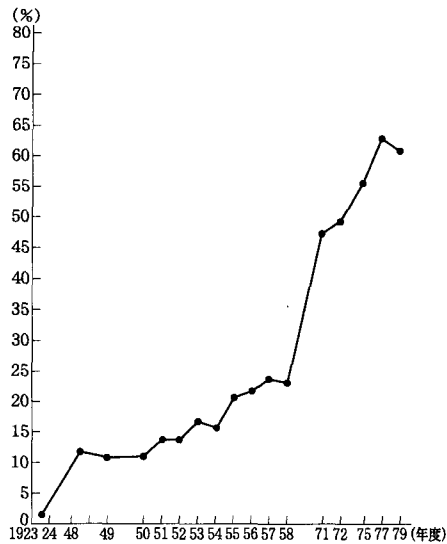
山 田 千 香 子

はじめに

個人レベルでみると配偶者選択という行動文脈には、個人の持つ内的な価値・規範が集約的に顕在化すると考えられ、さらに、婚姻のありかたは次の時代を担う日系カナダ人⁽¹⁾をどう社会化していくかという問題にもつながる。また、集団のレベルで考えると、ゴードン (Gordon, M. 1964) が婚姻 (インターマリッジ) を同化指標の一つの変数としても挙げている⁽³⁾ように、集団の維持や存続と関わってくる。そうした点からも、インターマリッジ⁽²⁾を含む日系社会の通婚パターンの分析は、カナダ日系社会の文化変容について考察する指標として有効であると考えられる。

カナダ国勢調査をもとに分析された「日系人の人口統計」(Kobayashi, A. 1989) によると、37歳以下では女性の90.2%、男性の88.4%がインターマリッジであり、非日系人をパートナーとして選択している。この割合の高さは、日系人の歴史的背景や定住過程等に共通点が多く見られる隣国アメリカの場合 (1977年の63.1%をピークに減少傾向。図1「日系アメリカ人のインターマリッジの変化」参照) と比較しても、注目に値するほど高い。その背景には、日系カナダ人の人口が少数であること、カナダ政府の第二次世界大戦中および戦争直後の日系人拡散政策によって地理的コミュニティが消滅したこと、さらに、現在、日系カナダ人が経済的・社会的に高い

図1 日系アメリカ人のインターマリッジの変化



(出所) Kitano, Harry H.L., *Race Relations*, Prentice-Hall, 1976.

地位を達成してカナダ社会にとけこんでいること等の要因があげられる。しかしながら、カナダ日系社会の婚姻に関する先行研究は少ない上に、これまでの調査内容は国勢調査から統計的に分析したマクロ的なものに限定されるため、時系列的变化や地域差、あるいは世代間の特色やその差、個人の配偶者選択に至る過程（個人の主体的対応）等の変化については分析されていない。この小論では、まず日系人の集中してきた特定の地域に調査を限定し、その地域の特色について、また、彼らへのインタビューから個人の内面にも焦点をあてマイクロな分析を試みたい。とくに二世とインターマリッジが増加した三世の世代について、世代間比較を試みながら考察していく。

本論で用いる具体的な分析資料は、戦前から多くの日本人が集中していたバンクーバー地区のバンクーバー仏教会およびスティブストン仏教会の婚姻記録、筆者が和歌山県出身者を中心として実施した調査資料、さらに

1987年5月にバンクーバーで開催された「日系カナダ人会議」の記録書 (*Spirit of Redress: Japanese Canadian in Conference*)⁽⁴⁾である。仏教会での婚姻に注目するのは、北米社会における婚姻は所属の宗教⁽⁵⁾によって執り行なわれることがほとんどであり、日本社会と異なるところだが、仏教会でも当然の事として結婚式があげられること、さらに、調査対象者の多くが仏教徒であり(二世80%, 三世21%), 仏教会に所属しているという理由によるものである。

具体的な調査期間, 調査地, 調査方法については以下のとおりである。

- * 調査対象者：和歌山県（三尾）出身の日系カナダ人。
- * 調査方法：二世一面接調査。(トロント：二世・帰加二世⁽⁶⁾ 80名, ス

図2 スティブストンとバンクーバー略図



(出所) 高田光子『遠き旅路の声——カナダ日系移民苦闘』1991年, p. i.

ティブストン：二世・帰加二世74名)三世一郵送による質問紙調査(トロント出身者：65名回収率85%，スティブストン出身者57名回収率61%)

* 調査期間：1995年7月～10月，1996年3月，1998年2月，1999年8月。

* 調査地：カナダ東部トロント地区，カナダ西部バンクーバー地区。

I. 先行研究

日系人のインターマリッジに関する研究としては，日系アメリカ人について調査したキタノ (Kitano, Harry H. L.) の一連の研究 (1969, 1976, 1985, 1989, 1993) があげられる。彼の研究は，日系アメリカ人の同化の過程や現在の状況について，日系アメリカ人の歴史から，家族やコミュニティ，文化等全般に渡った研究内容となっている。その中で日系人のインターマリッジについて，アメリカ社会の法制度の変遷⁷⁾も視野に入れたうえで，詳しく検討を加えている。

キタノの研究によると，インターマリッジはエスニック集団が分散居住することで，他のエスニック集団のメンバーとの接触の度合いが増し，それは居住地，教育環境，職業の面で関わってくるということをあげている。さらに，世代・年齢・学歴といった要素も関連し，収入のレベルが上昇することで，インターマリッジも増大することを指摘している。

カリフォルニア州のガーデナ (Gardena) での調査を行なったフジタ (Fugita, Stephen S) とオブライエン (O'Brien, David J) は，インターマリッジが増大した要因として，次の二点を挙げている。第一点は，第二次世界大戦後，アメリカ社会における日系人への偏見や差別が劇的に減少したこと，第二点は，二世が三世のインターマリッジに対して，一世が二世に示したような拒絶感を示さなかったことである (1997: 132)。このフジタとオブライエンが指摘する要因は，カナダの三世の状況にも該当することを，ここで，まず言及しておきたい。

また，東元はアメリカのユタ州で調査を実施し，ゴードンのいう構造的

同化とインターマリッジの相関関係を裏付けている。つまり構造的同化のレベルが高い人々の方が、インターマリッジの比率が高いという関係である。また、日系人の教育および収入のレベルの上昇が構造的同化を導き、インターマリッジと相関関係にあることを指摘している（東元1996：80—81）。

II. 理論的枠組み—文化変容

日本から海外への移民や移住者⁽⁶⁾が受け入れ国（ホスト社会）や、その文化にどのように適応してきたのか、あるいは適応していくのか。その過程は先行研究の示す「同化」や「文化変容」の過程として捉えることができる。とくにこれまで多くの研究が「同化」という視点から考察されてきた経緯がある。しかしながら、現在のカナダ社会において「What is Canadian?」という質問が飛び交うように、「カナダ人」の姿というのは曖昧である。地域によって英国系・フランス系に分かれるし、何への同化なのかが曖昧となる。第二次大戦以前に日系人が集住していたBC州においては、確かに、Anglo-Conformityであった。しかしながら、多文化主義政策を取り入れている現在のカナダ社会では、「Canadian」とは、すべての多民族集団を体現しているという意味付けも生まれている。そのような流れからも、カナダ社会を考察するのに「同化」は適切な用語ではなくなっていると考える。さらに、重要なことは、インターマリッジの問題を同化の視点から考えると、白人以外のエスニック集団との婚姻は否定的なものとなりかねないのである。巧妙に人種差別の思想が取り込まれてしまう危険性があるのではないだろうか。そのような点からも、本論では「同化」ではなく、文化変容という理論的枠組みから、インターマリッジの過程を捉えていくものとする。

本論では、文化変容を「異文化に接触する具体的個々人の異文化解釈、自文化の再解釈の集積であり、それを判断し、拒否あるいは受容しながら

選択していく具体的個々人の過程」と定義しておきたい。その過程を「主体としての個人」の視点から、かれらの内的世界（主観的世界）を見ることによって、個人が変動する状況に対応させての主体的選択の意味、異質性認識の意味を考察していく。

移住先でまず問題となるのは「人種」(race)や「民族集団」(ethnic group)という要素であり、受け入れ社会のマジョリティ (majority) 側の姿勢や態度が大きく関係してくる。19世紀末に日本人移民が参入していった西部カナダ社会は、Anglo Conformity のイデオロギーが支配的な社会であり、英国系白人が主流社会を形成していた。異なる人種に対する寛容度は低く、有色人種としての日系人は、主流社会への適応（言語・習慣・宗教等）が難しいと見られ⁹⁾、適応という点では多くの障害・困難に遭遇してきたといえる。

適応という視点から次に問題となるのは「世代」間の差である。説明するまでもないが「一世」は、日本から移住した人々を指し、「二世」はカナダで生まれた一世の子供たちを指す。一世は日本人であり日本という固有な社会で社会化されており、カナダ社会への適応は時代や移住年齢にも影響を受けるが、当然のことながら二世より困難である。一方、二世はカナダで生まれカナダにおける公教育を受けることで、カナダ社会の文化や価値観を取り込んでいく。人種や民族という点は変わることはないが、それ以外はカナダ人と同じ行動特性を共有していくと考えられ、適応は一世よりも当然容易である。けれども、学校教育が始まると徐々に、家庭内における異文化摩擦ともいえる世代間ギャップが、生じてくるのである。同時に、一世と二世の意思の疎通が時としてうまく図れないということが表面化してくるようになる。

しかしながら、どの世代においても成長する過程で、時代的な背景・歴史的な要因の影響を受けるものである。そのような視点から、以下、二世と二世の子供である「三世」の状況について、具体的な事例を辿りながら考察していくことにする。

Ⅲ. 二世の世界・三世の世界—各世代の時代的背景⁽¹⁰⁾

友人との交際の基盤を、エスニック集団内におくかエスニック集団外におくかは、個人のエスニック集団への帰属とアイデンティケーションの強さをみる指標として有効であると考えられる。しかしながら、まず初めに、各世代が成長した時代的背景に言及したうえで、調査資料の分析を試みたい。カナダ社会において日系人はどのような社会状況に置かれていたのか、日系人は成長過程でどのようなコミュニティに属していたのかを考察することが重要であると考えられるからである。なぜなら友人の選択にしても、場合によっては限られた社会環境のなかでの選択を余儀なくされていたと考えられるからである。以下、友人の選択、職場の人間関係、婚姻について考察していく。

1. 二世の世界

ここでは、彼らの主観的世界を彼らの「語り」によって記述していきたい。まず、家庭内での子供に対する親の言動（しつけ）、幼少期、学童期、思春期における経験、さらには職場での経験等を見ていく。

(1) 友人の選択

* 幼いころは、非日系人の友だちと自由に遊べたし、何の違いも感じなかった。思春期に入り女の子と出かけるようになったときがターニングポイントだったと思う。それからは、付き合うグループが厳格に分けられ、それまでとは全く違ってしまった。⁽¹¹⁾

* 学校だけが非日系人と一緒になる唯一の時間だったけれど毎日、午後4時から5時半まで日本語学校に行っていたので、交わるチャンスもなかった。⁽¹²⁾

* 白人と付き合い彼らと仲良くしようとすれば、すぐに他の日系人の子供仲間から、よってたかって脅かされた。⁽¹³⁾

二世は言葉に不自由はないが、差別や排斥からの「傷」があること、ま

た上記の語りが示すように、学校以外は日系社会の枠から出ることの無い人間関係で社会化されたことにより、非日系人と親しい友人関係を持つ二世は、和歌山県出身者においてはほとんど見受けられない。日系人との交際関係に重点おいた生活をしている。また、たとえば、ダンスに行こうとすると「白人のようにふるまう」と非難されたと述懐する二世もいる。日系社会という「世間」の規範は、二世が白人社会との交流や文化を身につけていくことを認めなかったのである。

* 私の両親が日本からカナダへ初めてやって来て来たことは、日本人同士で一緒にまとまり固まることでした。両親は子供に命令し、子供を同じエスニック集団内にとどめようとしていました。(14)

* 私はその当時白人におべっかと言わなかった。私はカナダ人だし、友情でも何でもこちらから請わなくても、受け入れられるべきだと考えていた。家では、オールダー二世の父と母が、日本は優れた国なのだと私を洗脳していました。(15)

一世は二世に対して日本人 (Japanese)、二世 (Nisei) という言葉を日常的に用い、カナダ人 (Canadian) という言葉を二世に対して用いるときは、軽蔑的に使っていたようである。一世にとってカナダ人のように物事を行なうということは、否定的なことであったと考えられる。しかしながら、二世は以下の語りが示すように、「二級市民」(second citizen) という社会からの視線を敏感に感じ取りながら、成長してきたと言っている。

* 1942年以前の若かった時は、白人になりたいと思っていた。差別があったし、白人であることは特権だったから……こんな風に考えながら人生を過ごしてきた。でも、その結果、今思うのは、自分は平均的なカナダ人以上に、愛国心の強いカナダ人だと感じている。(16)

一方で次のように語る二世、

* 私は白人になりたいことはありませんでした。そのようなことは

現実的なことじゃないと知っていたし、日系人であることを私は受け入れていました。でも、何度も自分が劣っていると感じさせられました。私はグレード1のときに知能テストを受けました。問題の一つは、三匹のウサギ (rabbit) を丸で囲み、二本のほうき (broom) に×をつけるというものでした。家ではいつも日本語を話していたので、もし「usagi」「hoki」と言ってくれたら、分かったと思います。でも、知らなかったのでどこに○や×をつけていいのかわからず、くじけてしまいました。

また、先生は、「健康に良いことだから、たくさんのミルクを飲み、たくさんのチーズを食べなさい」とおっしゃっていました。私はご飯や漬物のようなものを食べていて、そのような体を良くする物をとっていなかったの、バクテリアでいっぱいなんだと、確信をもってしまったのです。⁽¹⁷⁾

社会的な差別や偏見、排斥の存在は、人間の心に「傷」を作り出す。その傷は、上記に語られるように、異文化との葛藤の中で、マジョリティ側が何気なく使用する言葉にも敏感に反応し、二世の「劣位意識」を顕在化させていったのである。

(2) 職場での人間関係

二世は一世から与えられた教育や、一世が持たなかった英語という言葉
を武器として、数々の分野に進出していった。

* 生き残ることへの本能在最優先される課題となった。平等に受け入れられる為には、学校であれ、仕事であれ、「二倍努力なさい」、私にとって、そのことは葛藤の連続だった。仕事において手を抜いたり、あるいは平均的にということはありえなかった。両親は、休憩時間は1分でも余計にとるなと言っていた。私にとって退社時間は5時半だった。私はいつも5時にエレベーターに乗る人たちを羨んでいたものだった。⁽¹⁸⁾

* 白人の世界で働いているときは、考え方を変えています。意

識的に別の文化に切り替える努力をしなければならないので
す。⁽¹⁹⁾

(3) 婚姻に対する考え方

インターマリッジに関しては、二世の時代と三世の時代を分けて考えなければならない。二世の年齢をみると幅広く、一定の年齢層に特定はできないが、平均するとちょうど第二次世界大戦をはさんだ1940年代から1950年代に成人を迎えた世代が多い。インターマリッジに対する社会的偏見や差別・抑圧が存在していた時代である。カナダ社会においても日系人側にあっても、婚姻は同じエスニック集団内で為されるのが望ましいとの考え方が圧倒的であった。双方の関係のなかで、配偶者選択に関して互いを対象外として認識していたわけである。次の事例（父が日系人、母が白人である三世による語り）がその状況を説明してくれるだろう。

* 両親が結婚した時代は、インターマリッジは大変なことで、親戚間でもほとんどありませんでした。とくに戦争直後のインターマリッジに対する（社会的）感情はひどいもので、私の母は家族から10年間も一切の関係を絶たれました。だれも母に話しかける人はいませんでした。父は白人女性との結婚は冒瀆行為であるとして、田舎の若い白人から数回ひどく殴られました。そんな雰囲気でした。⁽²⁰⁾

次は二世の場合と同様な視点から、三世の世界を見てみよう。

2. 三世の世界

(1) 友人関係

親しい友人関係が築かれていくのは、ほとんどの場合、一緒に遊んだり、一緒に学んだり、働いたりという経験をともに共有するという過程の中であるといっていいただろう。しかしながら、多くの三世には、次のように日系人と出会うチャンスは少ないのである。

* 私の妻が息子に「どうして日系人の女の子と出かけないの？」

と聞いたら、「学校で日系人はぼく一人なのに、どうして日系人の女の子と出かけることが出来るの」という返答でした。(21)

* 僕の小学校では僕が初めての日系人でした。日系人はたった一人しかいませんでした。(22)

筆者が作成した調査票の「友人」に関する質問項目は、「あなたが困ったときに話せる親友を二人挙げてください」というものである。彼らの年齢、性別、人種・民族的背景や、いつからの知り合いか、学歴、職種等その他の事項を尋ねた問いである。その問いへの回答が示すのは圧倒的に非日系の友人であり、その非日系人のなかで三世が親友としてあげるのは、圧倒的に白人が多い。次に日系人、そして日系以外の東洋系と続く(23)。

「できれば日系人と知り合って、ゆくゆくは結婚してほしい」という希望は多くの二世が抱いてきた。子供の三世を幼いうちから、どんなに遠方であっても、送り迎えを厭わずに、積極的に日系人のグループに参加させる親が多かった。キリスト教の日系教会、そして仏教会、日本語学校、スポーツクラブへと通わせたりするのである。そのような親の働きかけがない場合は、全く日系人との接触はむずかしかったようである。

* 私は日系人と結婚できたら……と思っていたが、トロントの市街地で育ち、どこに日系人がいるかも知らなかった。出会うチャンスがなかっただけ。(24)

全体として、三世の交友関係は二世よりはるかにオープンである。和歌山県出身者の三世においても、日系人の友人はいないとの回答が50%以上を示す。むしろ三世は白人との積極的な交友関係を結んでいるというより、周りに日系人がいない環境にあった三世の多くにとって、日系という選択肢は存在しなかったし、非日系人以外しか選択の余地はなかったといえるのではないだろうか。

(2) 職場での人間関係

三世の時代は、一世や二世が築いてきた日系社会に対する一定の評価がほぼ形成されていた。「成功した勤勉なマイノリティ」「モデルマイノリテ

図3 職場で日系人の占める割合

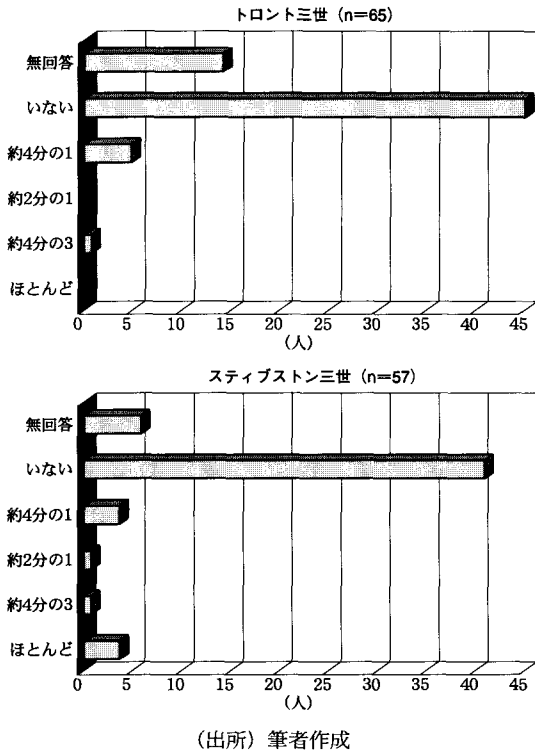
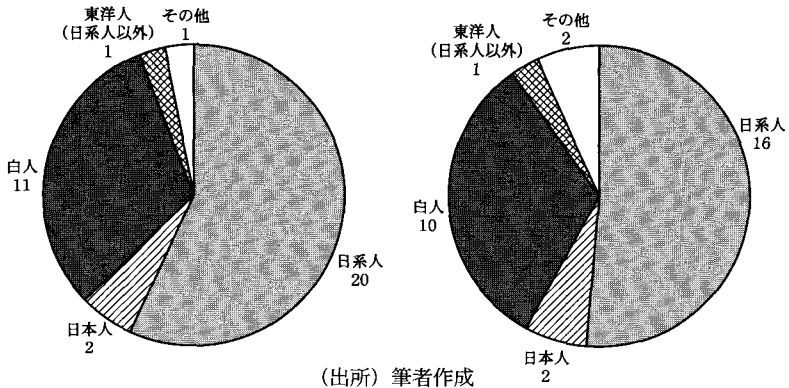


図4 トロント三世結婚相手 (n=35) スティブストン三世結婚相手 (n=31)



ィ」⁽²⁵⁾ というものである。それはカナダにおいて、現在でも日系人への強固なステレオタイプとして存在している。そうした評価・信頼が築かれると、「〈優秀で勤勉〉という日系人へのステレオタイプのおかげで仕事を得られた」というような利点も生まれ、日系人であることのエスニック・プライドも芽生えてくる⁽²⁶⁾。三世の高学歴化も加速し、二世の時代より明らかに仕事は得られやすく、働きやすくなっていたのである。

職場で日系人の占める割合（図3参照）を見ると、トロントにおいてもスティブストンにおいても圧倒的に、同じ職場に日系人は「いない」という回答が郡をぬいている。その一方で、スティブストンでは3名が「ほとんどが日系人」と回答している。職業を見ると「漁業従事者」と「ガーディナー」であり、スティブストンの地域性が表れている。

また、三世の婚姻状況に関しては、日系人44.5%、日本人4.5%、東洋人6%、白人42%、非白人3.5%である（図4参照）。日系人同士の結婚が90%を超している二世の場合に比べて、ほぼ半数近くに減少している。白人社会のなかで育った三世にとって日系人との出会いも少なく、日系人を選択肢とすること自体が難しいということが歴然としている。ある三世は「配偶者を選択する際に、日系人を探すことが必要だとは思わない」と述べている。

一方、白人ばかりでなく他のエスニック集団のメンバーとの結婚も、明らかに増加している。しかしながら、このインターマリッジの数値（52.5%）⁽²⁷⁾ を日系カナダ人全体のインターマリッジ調査結果の90%に照らし合わせると、37.5%もの差がある。その性別割合をみると男性が28%、女性が72%を示し、圧倒的に女性のインターマリッジの割合が高いのが特色といえるだろう。

婚姻に際して親の言動が、子供の配偶者選択に影響を与える度合いは、世代が移行するにつれて弱くなってきているし、子供の婚姻に対して干渉するという親も減少している。しかしながら、親である二世は三世のインターマリッジを当然のこととして受け止めているわけではなく、戸惑いを

感じながらも最終的には受け入れる傾向にある、と言っているだろう。

* 二世と三世の基本的な違いというのは、三世は自分が正しいと信じることを行なう傾向があり、二世は両親が正しいとすることを行なってきた。もし三世が日系人以外の誰かと、恋に落ちたとしたら、両親がどのように感じるかは関係なく、結婚するでしょう。私たちの時代は、両親の希望を受け入れていました。⁽²⁸⁾

一方で、三世の時代は、人種差別や迫害が問題となることも少なくなった。日系カナダ人を取り巻くそうした状況の変化は、異なるエスニック集団間の垣根を低くし、お互いを婚姻の相手として接近させたといえるだろう。「インターマリッジは二つの文化の組み合わせであり、ブレンドすることは良いことで、それがカナダの文化」という考えも多い。また「インターマリッジは肯定的なことで、おそらく最初は難しくとも、人種差別をなくする方法でもあると思う」という認識も注目される。また、インターマリッジは、マジョリティ（白人）のマイノリティ（日系人）に対する容認であると同時に、マイノリティのマジョリティに対する容認 (Makabe 1998: 122) とも指摘されている。三世のインターマリッジに対する大方の見解は、以下のようなだろう。

* エスニシティは重要な要因ではなく、同じエスニック集団内の婚姻ということへのこだわりもない。

* (配偶者選択の過程で)私の考えでは、民族的背景は決定的な要因とならなかった。⁽²⁹⁾

IV. 通婚パターンの変化—Vancouver および Steveston 仏教会の婚姻記録より

まず初めに、二つの仏教会の婚姻記録 (表1・2参照)から時代的変遷を考察していくことにする。それぞれの仏教会に現存する資料は1963年、1964年から1994年 (筆者の仏教会での調査および資料収集は1995年) までであ

表1 日系カナダ人の通婚パターンの変化—Vancouver 仏教会—

年	総件数 (A)	日系人合計 (A)-(B)	外婚	(%)	J/J	J/W	W/J	J/C	C/J	J/K	J/T	N/N	(B)
1963	1	1	0	0.00	1								0
1964	8	8	1	12.50	7	1							0
1965	8	7	2	28.57	5	1	1						1
1966	14	14	0	0.00	14								0
1967	14	13	0	0.00	13								1
1968	0	0	0										0
1969	1	1	0	0.00	1								0
	46	44	3	6.82	41	2	1						2
1970	UN												
1971	UN												
1972	UN												
1973	UN												
1974	UN												
1975	UN												
1976	UN												
1977	5	5	3	60.00	2		3						
1978	1	1	0	0.00	1								0
1979	6	5	1	20.00	4				1				1
	12	11	4	36.36	7		3		1				1
1980	5	5	3	60.00	2	2			1				0
1981	10	9	2	22.22	7				2				1
1982	5	4	2	50.00	2		2						1
1983	6	6	2	33.33	4		2						0
1984	2	2	0	0.00	2								0
1985	6	6	6	100.00			2		4				0
1986	5	3	2	66.67	1		2						2
1987	5	5	5	100.00		2	1	1		1			0
1988	4	3	0	0.00	3								1
1989	5	3	2	66.67	1		1	1					2
	53	46	24	52.17	22	4	10	2	7	1			7
1990	1	1	1	100.00		1							0
1991	2	1	1	100.00		1							1
1992	4	3	2	66.67	1	1			1				1
1993	3	2	2	100.00			1				1		1
1994	4	4	2	50.00	2	1	1						0
	14	11	8	72.73	3	4	2		1		1		3
年次不明	2	1	1	100.00		1							1
計	127	113	40	35.40	73	11	16	2	9	1	1		14

(注) 略記号：J/J=夫婦とも日系；J/W=妻は白人；W/J=夫は白人；J/C=妻は中国系；C/J=夫は中国系；J/K=妻は韓国系；K/J=夫は韓国系；J/T=妻がタイ系統；N/N=非日系人どうし；UN=記録なし
(出所) 婚姻記録より筆者作成

表2 日系カナダ人の通婚パターンの変化—Steveston 仏教会—

年	総件数 (A)	日系人合計 (A)-(B)	外婚 (%)	J/J	J/W	W/J	J/C	C/J	J/K	K/J	J/T	N/N
1964	5	5	3	60.00	2				1			
1965	8	8	0	0.00	8				1			0
1966	4	4	1	25.00	3	1						0
1967	3	3	1	33.33	2							0
1968	5	5	3	60.00	2	1	1		1			0
1969	8	7	1	14.29	6				1			1
	33	32	9	28.13	23	2	3		4			1
1970	5	5	2	40.00	3	2						0
1971	4	4	2	50.00	2	1	1					0
1972	3	3	1	33.33	2		1					0
1973	7	7	5	71.43	2	2	2	1				0
1974	9	9	1	11.11	8		1					0
1975	5	5	2	40.00	3	1	1					0
1976	7	7	2	28.57	5		2					0
1977	2	2	1	50.00	1				1			0
1978	3	3	2	66.67	1	1		1				0
1979	1	1	1	100.00		1						0
	46	46	19	41.30	27	8	8	2	1			0
1980	3	3	3	100.00		2	1					0
1981	3	3	1	33.33	2			1				0
1982	1	1	0	0.00	1							0
1983	1	1	0	0.00	1							0
1984	1	1	0	0.00	1							0
1985	5	5	4	80.00	1	2	2					0
1986	2	2	0	0.00	2							0
1987	2	2	2	100.00				2				0
1988	4	4	1	25.00	3		1					0
1989	5	5	4	80.00	1		4					0
	27	27	15	55.56	12	4	10	1				0
1990	4	4	2	50.00	2		2					0
1991	3	3	2	66.67	1		1	1				0
1992	2	2	2	100.00		1	1					0
1993	4	4	4	100.00		1	3					0
1994	2	1	1	100.00			1					1
	15	14	11	78.57	3	2	8	1				1
年次不明	2	2	0	0.00	2							0
計	123	121	54	44.63	67	16	29	4	4	1	0	2

(注) 略記号：J/J=夫婦とも日系：J/W=妻は白人：W/J=夫は白人：J/C=妻は中国系：C/J=夫は中国系：J/K=妻は韓国系：K/J=夫は韓国系：J/T=妻がタイ系：N/N=非日系人どうし
(出所) 婚姻記録より筆者作成

る。バンクーバー仏教会は1905（明治38）年に、スティブストン仏教会は1928（昭和3）年にそれぞれ設立されているが、残念ながら創立以来の記録は、第二次世界大戦中の総移動⁽³⁰⁾により喪失している為、本表1、2に表示されていない。

表1と表2は、それぞれの教会の婚姻記録に基づいて、エスニック集団内の婚姻（内婚）とエスニック集団外との婚姻（外婚）について、その変化の割合を調べたものである。

表から、次のような事項が指摘できるだろう。

- (1) 全体的傾向性としては、外婚（インターマリッジ）の割合が年代ごとに上昇し、とくに1990年代に高くなっている。しかしながら、先行研究で示された90%には達していない。
- (2) 男女ともに結婚相手は白人が圧倒的に多く、次いで中国系が続く。
- (3) 両仏教会ともに W/J（夫が白人・妻が日系：計45）の組み合わせの方が J/W（夫が日系・妻が白人：計26）より多く、男女差が存在する。
- (4) Vancouver 仏教会の方が比較的、カップルの組み合わせに多様性が見られる。
- (5) 1973年を境として結婚する世代が二世から三世への移行を示している。

ここでは、以上の事項の中から、とくに(3)の内容について考察を加えた。表1、表2から示唆されることは、男性よりも女性にインターマリッジの割合が高いことであり、インターマリッジと性別の間にはかなりの関連が認められるということである。前述したことだが、和歌山県出身者への調査においても同様の傾向を示している。この現象を説明する理由として、日系アメリカ人に関するナカノの研究、『日系アメリカ女性—三世代の100年』（1992）における指摘を参考にしながら考えてみたい。ナカノは1960年以前のアメリカでの調査結果について、次のように言及している。

第一として、白人男性とアジア系女性の結婚のほうが社会に受け入れら

れやすかったとする説である。男性の方に女性を選ぶ権利があると当然思われていたし、その考えに従えば男性はあらゆる権利を有していたともいえる。

第二は、白人社会では、アジア系男性より白人男性のほうが昇進の機会が圧倒的に多く、白人男性と結婚したほうが女性の地位も上がりやすいと思われていたことである。だが、アジア系男性のイメージや経済状態が徐々に好転してきたため、1960年以降、他人種との結婚率では男女の差がなくなってきたようだ。

第三として、家庭内の夫婦の役割に対して、白人男性のほうが家事分担など男女平等を実行するという点に魅力を感じる女性もいる。日系男性は日系女性や白人の男女に比べて、結婚生活で男性上位の態度をとっているという調査結果もある(ナカノ1992:247-248)。以上の三点である。さらに、ナカノはある女性との次のようなインタビューも紹介している。

* 白人の彼と結婚したのは、私が日本人のままにいられるからです。日系人と違って、夫は私が日本人らしさを失わないよう励ましてくれます。日系社会の出来事には興味津々で、日本文化の香りのあるところへはいそいそと出かけていきます。もちろん彼は日本食が好きですし、作り方まで習っているのですよ (ナカノ1992:248)。

上記の中でも、第一の理由「白人男性とアジア系女性の結婚のほうが社会に受け入れられやすかった」と共通すると考えられるのが、次のようなカナダ社会における認識である。白人の男性と日系人の女性が通りを歩いている姿、あるいはレストランで一緒にの姿を見かけた場合と、日系人の男性と白人の女性が同様の状況で一緒にの場合を見かけた場合とでは、前者の状況のほうが可視性が低く、目につきにくい⁽³¹⁾というものである。また、日系アメリカ人二世を対象とした調査では、娘よりも息子のインターマリッジの方が親として困惑率が高い⁽³²⁾という指摘は、注目すべきであろう。あくまでも、推測の域でしかないが、それは日系社会における息子に対す

る期待度の裏返しなのではないだろうか？

長男が白人女性との結婚をしたときのとまどいと、今後、日系人であることを示す唯一の姓がどのようになっていくのかという不安、寂しさといったような感情を、和歌山県出身の二世は次のように語ってくれた。

* 長男からグレンと結婚したいと言われたときは驚きました。それまで、口には出してこなかったけれど、日系人と結婚してほしいと思っていました。今は、YOSHIDA の姓になっているが、この孫たちのつぎの代になると、YOSHIDA の姓をついでくれるかどうか考えます。顔は白人のようだし、白人の中に出て行くとき、日本人の名をどう思っているのだろうか？そんなこと、聞いたことがないけれど一度そのことを聞いてみたいと思っています⁽³³⁾。

また、第二の理由と関係する日系カナダ人からの発言としては、次のようなものがある。「男性支配という図式のなかでは、日系女性が白人(男性)と結婚するほうが簡単だと思う」というものである。さらに、第三の理由に関係するものとして、筆者のインフォーマントへのケースにおいても、非日系人のパートナーのほうが、日系人のパートナーの場合よりも日本文化に関心を持つ傾向にあることは同様であった。また、日系女性からの「日系人の男性はたいくつで、おもしろくない」という評価⁽³⁴⁾は、第三の理由と繋がることであろう。

以上のことから、ナカノの指摘する三点は、カナダ社会において女性のインターマリッジが高い理由としても、該当すると考えられる。

なお、戦後の1960年代後半から、日本からカナダへ移住した「新移住者」(あるいは「新移民」「新一世」と呼ばれる日系人の婚姻の傾向性について、簡単に触れておきたい。以下の資料は1973年9月から1974年1月までの5ヶ月間にBC州在住の日本人移住者(戦後移住者)を対象に、海外移住事業団が実施した調査結果である。参考までに〈資料〉として掲載する。

新移住者の場合、男性は日本在住の女性との婚姻を望み、女性の場合は

図5 結婚の相手には、日系人を選びますか。(未既婚別, 性別)

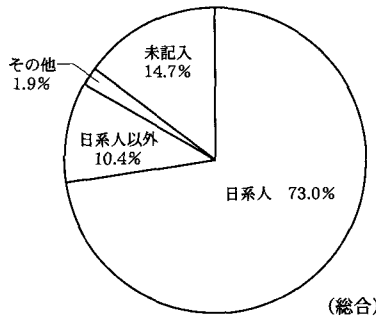


表3 結婚の相手には、日系人を選びますか。

区分	性別		男性			女性			総計
	職業別	未既婚	計	未既婚	計	未既婚	計		
								未既婚	
ア. 日系人	27	111	138 (86.8%)	6	10	16 (30.8%)	154 (73.0%)		
a. 日本から呼ぶ	21	51	72 (52.2%)	2		2 (12.5%)	74 (48.1%)		
b. 日系移住者	1	26	27 (19.6%)	2	2	4 (25.0%)	31 (20.1%)		
c. 二世, 三世	2	4	6 (4.3%)		7	7 (43.6%)	13 (8.4%)		
未記入	3	30	33 (23.9%)	2	1	3 (18.9%)	36 (23.4%)		
イ. 日系人以外	4	2	6 (3.8%)	6	10	16 (30.8%)	22 (10.4%)		
ウ. その他				4		4 (7.7%)	4 (1.9%)		
未記入	11	4	15 (9.4%)	14	2	16 (30.8%)	31 (14.7%)		
合計	42	117	159	30	22	52	211		

(出所) 海外移住事業団『ブリティッシュ・コロンビア州移住者動態調査』1974年, p. 29.

二世、三世及び非日系人の男性を伴侶とする傾向が、表から示唆される。特に非日系人との婚姻数あるいは婚姻希望数は半数を占めており、男性が日本の女性との婚姻を望む傾向と対照的である。女性の既婚者で非日系人の相手のエスニシティは、カナダ系(白人の移住者)⁽³⁵⁾、ドイツ系、フランス系、イギリス系、ラテン系となっている。女性が婚姻の相手を「日本から呼ぶ」というケースは、未婚女性に希望としてあげられていても既婚者には、一例もみられない。新移住者においても、男性よりも女性の方が非日系人との婚姻の多いことが注目される。

おわりに

日系カナダ人のインターマリッジは、戦時中および戦後のカナダ政府の政策によってコミュニティが崩壊してから、他のエスニック集団⁽³⁶⁾よりも急激に増加している。カナダにおいて戦前のような日系コミュニティは、現在に至っても再建されていない。彼らは戦争によって受けた排斥の「傷」から目立たないように努め、大都市に分散居住し意識的にも固まらないようにしてきた。そのようにしてカナダ社会に溶け込もうと努力してきた経緯が、インターマリッジの増加を促した要因として第一に挙げられるだろう。

婚姻に関してより重要なことは一体何であろうか？一世の時代にはインターマリッジは念頭にも浮かばない事柄であり、特に第二次世界大戦以前はタブーの領域に属していた。二世の時代には、「日系人社会」という世間から「後ろ指をさされること」であった。二世の婚姻に対する考え方は、文化的背景や時代的経験を共有できる事を重要な条件として捉えており、婚姻相手として「日系人」にこだわり、三世にも同じ事を期待した。けれども、多民族・多文化主義社会のカナダで、日系コミュニティを持たず周りが白人社会の中で成長した三世は、「日系人」よりもまず「カナダ人」であることがアイデンティティの核にある。基本的には白人と同一視している場合が多い。また、三世自身に minority としての意識も薄く、カナダ社会のなかで、これまで一世や二世が感じてきた自己に対する異質性認識は彼らにはなくなってきているようである。三世は自分を日系人と意識しても、minority としては認識していない傾向が強くなったという調査報告⁽³⁹⁾は、三世の態度の一側面として注目すべき点であろう。

三世の世代が社会的活動の中心を占めている現在、そのような三世の行動様式や価値観に照らし合わせると、インターマリッジは当然の帰結なのかもしれない。

* 結婚相手を日系人にこだわって探すことは必要ないと思う。

相手が日系人であるということだけで、その結婚が良い結婚になるとは限らない。肌の色はどうかであれ、より重要なことはその人個人であり、その人の価値観であると思う。⁽³⁹⁾

* 私にとってカナダ人とは、言葉も、食べ物も、衣服も、人種も何でも、非常に多様だと思う。インターマリッジはカナダ人であることの一部になっていて、決して珍しいことではない。⁽⁴⁰⁾

という三世の回答は、三世の世代に広く受け入れられている考え方の方である。そうした考え方が三世の次の世代である四世にどのように伝えられるのか、四世における婚姻の形態はどのような変化を示すのか、今後も注目していきたいと思う。

仏教会の婚姻資料と筆者の和歌山県出身者への調査の双方から、日系カナダ人の通婚パターンの変化の分析を試みた。三世において確かにインターマリッジは進行しており、その内容も多様な組み合わせが生まれてきているが、筆者の調査においては先行研究ほどの高い数値には達していない。この違いはおそらく1970年代に増加した戦後の新移民⁽³⁷⁾と呼ばれる世代とその子供たちの婚姻が、筆者自身の調査の対象に加えられていなかったことによるものと考えられ、今後の課題としておきたい。

最後に、同じ母村を背景とした文化を持った人々が、同じカナダ国内であってもその後の移住先の違いという環境の違いによって、異なった変化、つまり地域差がうまれることが示された。それは、日系人あるいは日系社会といっても決して一枚岩ではなく、多様な内部構造の可能性を示しており、そうした点はマクロな視点のみでは抜け落ちてしまうものではないだろうか。ミクロな視点を常に考慮に入れた調査の必要性を痛感している。

なお、本論は1998年12月の日本移民学会第9回研究大会(於：慶応大学)での報告内容に、1999年の調査を加えてまとめたものである。

謝 辞

最後に、本調査にご協力下さった日系人のすべての方々に感謝申し上げます。また、貴重な婚姻記録資料の閲覧を許可して下さったバンクーバー仏教会の Rev. Fujikawa, ならびにスティブストン仏教会の Rev. Kirbybayashi に謝意を表します。

〈註〉

- (1) 本論における日系カナダ人とは、日本人を祖先とするカナダ人を指している。つまり、父母・祖父母、あるいは曾祖父母が日本からカナダへ移民した人々であり、その子孫を指すものである。日本国籍を有しないが、民族的には日本人と見なしうる人々である。

カナダにおいて国勢調査時に要求される自己の人種の背景 (race)・民族的出自 (ethnic origin) の申告は、1981年までは父系血統を辿る方法で「白人」「先住民」「黒人」「中国人」「日本人」「その他」のカテゴリーに分けられていた。しかし、1981年以降は (1996年まで) そのカテゴリーでは対応できない社会状況に照応し、本人が帰属すると考えるカテゴリーの自己申告 (self-identification) 制の採用となった。single origin と multiple origin の両方で回答でき、例えば、100%日本人の血を引いていると考えられる二世あるいは三世と、100%イギリス人の血を引いていると考えられる白人との間に生まれた子は、本人の帰属意識次第であり、本人が日本人と認識するかイギリス人と認識するか、あるいは両方ともというケースも考えられるように、本人の自己認識に任されていたのである。本論においても、この枠組みを適用している。

なお、1996年の国政調査の項目には、「visible minority」(可視的少数民族)のカテゴリーが加わった。「visible minority」とは、先住民以外の者、人種的にCaucasian (白人) 以外の者、さらに肌の色が「白」以外の者と定義されている。(The Employment Equity Act defines the visible minority population as persons, other than Aboriginal peoples, who are non-Caucasian in race or non-white in colour. *Statistics Canada, 1996 Census.*) この「visible minority」という新たな項目の採用については、人種差別を排除しようとしている今の時代に「なぜ、人種を問題にするのか?」という社会的論議を引き起こしているが、こうした問題点については本論の主題から外れるので、別に機会に論じたい。

- (2) 本論では「インターマリッジ」(intermarriage) を、interracial marriage (異なる人種間の結婚) だけではなく、異なるエスニック集団のメンバー間の結婚も組

み入れた概念で使用していく。

- (3) ゴードンはホスト社会への同化を測る「変数」として7項目挙げている。その中でも最終的な同化のレベルがホスト社会の構造への参入を意味する「構造的同化」であり、大規模なインターマリッジが必然的プロセスとして生起するという「結婚による同化」について言及している (Gordon, 1964: 71)。
- (4) カナダ全土から日系人がバンクーバー集まり、1987年の5月16・17日に開催された日系人会議。1940年代にカナダ政府によって実施された「日系人の強制移動・収容」が、日系コミュニティに対してどのような影響を及ぼしたのか、初めてさまざまな角度から検討された。その会議の記録書は、「日系人の強制移動・収容」からこれまでに至るさまざまな体験が綴られた貴重な資料となっている。開催されたワークショップのタイトルは、以下のとおりである。「Racism and Human rights」「Coping with Aging in a Community Dispersed」「The Generations: Identity, Intermarriage, Leadership」
- (5) 婚姻の主役は女性と考えられており、女性側の宗教が優先される傾向にある。また多様性はあるが、結婚式や披露宴においても、新婦やその家族の意向が重視され、主導権は女性側にある。それと同時に、女性側の経済的負担も大きくなっている。
- (6) 「帰加二世」とは、日本人を両親としてカナダで生まれ、就学年齢になると親の希望等で日本に送られ、高等小学校、旧制中学、あるいは女学校までの学校教育を受けた後、再び渡加(帰加)した二世を指す言葉である。世代的カテゴリーは「二世」であっても、彼らの意識構造は二世よりも一世に近いものである。自分の選択というよりは親の選択によって日本とカナダを往復し、また戦争を含んだ体験は「時代に翻弄された」と表現できるだろう。そうした体験は彼らに、一世でもなく二世でもない「帰加二世」独自の意識を強くさせている。そうした独自性が関係して、彼らのインターマリッジの例は僅かとなっている。その為、本論の考察対象から帰加二世は省いてある。帰加二世のアイデンティティの詳細については拙著『カナダ日系社会の文化変容—「海を渡った日本の村」三世代の変遷』(2000年)を参照されたい。
- (7) アメリカのカリフォルニア州では、1850年から続いた「異人種間通婚禁止法」が1948年に無効となったが、連邦裁判所によってこの法律がアメリカのどの州においても無効となったのは、1967年になってからのことである。(Kitano 1993)
- (8) 「移民」という言葉から「移住者」という言葉への変化は、戦後とくに1960年代後半から海外移住者が増加の傾向を示すようになった時代と重なり合っている。その経緯としては、戦前における「移民は棄民」との言葉が示すように、否定的なイメージがつきまとっていたことで、戦後、公文書などを初めとして「海外移住」が使用されるようになったことがあげられる。
- (9) 1902年に出された「中国人移民および日本人移民に関する政府調査委員会報告」

〈史料名〉 Canada, Report of the Royal Commission on Chinese and Japanese Immigratin, 1902) では、日本人移民について以下(抜粋)のように記述されている。「ブリティッシュ・コロンビア州の人々の一致した意見では、日本人は白人に同化していないし、また同化できないということである。そしていくつかの点では、日本人は中国人よりも望ましくない反面、日本人は中国人よりもわれわれの生活習慣を身につける覚悟であり、中国人よりもお金を使うのだが、永住を考えた場合、日本人は中国人同様、深刻な脅威であり、労働者に対して怖い競争相手となる。そして、日本人は根性と独立心を備えているので、この点に関しては中国人よりも危険である。」(日本カナダ学会編『史料が語るカナダ』有斐閣、1997年、281頁)

- (10) 日系カナダ人の歴史的背景の詳細については、拙著(2000年)を参照頂きたい。
- (11) Kobayashi, Cassandra. & Miki, Roy eds. 1989. *Spirit of Redress: Japanese Canadians in Conference*. JC Publications. p.91.
- (12) Ibid., p.91.
- (13) Ibid., p.96.
- (14) Ibid., p.92.
- (15) Ibid., p.95.
- (16) Ibid., p.94.
- (17) Ibid., p.94.
- (18) Ibid., p.97.
- (19) Ibid., p.100.
- (20) Ibid., p.104.
- (21) Ibid., p.105.
- (22) Ibid., p.101.
- (23) 詳しくは、拙著『カナダ日系社会の文化変容』2000年、219--222頁参照のこと。
- (24) Makabe, Tomoko. 1998. *The Canadian Sansei*. University of Toronto Press. p.123.
- (25) アメリカにおいては、1970年代以降、日系人の「成功物語」や「モデル・マイノリティ」という視点は白人側からの視点であると、日系人自身が抗議している。その理由として、他のマイノリティの社会的困難状況が、マイノリティ自身の責任に転嫁・拡大され、マイノリティが直面している人種差別や不正義による困難な現実状況を覆い隠す、ということが指摘されている (Iino 1989)。
- (26) しかしながら、三世の場合、次の段階の問題に遭遇している。被雇用者から経営者側の地位に、あるいは同様の地位につくようになると、勤勉という特質は重要視されるものではなく、自分が他の人とどのように関わっているかを理解しなければならなくなるという。次のような問題を考慮しなければならなくなる。「この国で自分より劣位にいる人の下で働くことを憤慨する人もいるのである」という

状況が存在することである。Visible minority としての日系人の中で働くことへの拒否である。多文化主義の考え方が浸透する中で、こうした問題も顕在化するのを、私たちは理解しておかねばならないだろう。

- (27) 同じ三世でも帰加二世の子供たちだけに限定すると、インターマリッジの数値は T37%, S34%とその割合が低くなる。このことから、帰加二世は二世の場合よりも子供である三世の婚姻に影響力を行使しているのがわかる。とりもなおさず、日本的な考え方が踏襲された行為であろう。
- (28) Kobayashi, Cassandra. & Miki, Roy eds. 1989. *Spirit of Redress: Japanese Canadians in Conference*. JC Publications. p.26.
- (29) Makabe, Tomoko. 1998. *The Canadian Sansei*. University of Toronto Press. p.123.
- (30) 太平洋戦争の開戦によって執行されたカナダ政府による戦時中の日系人政策（戦後まで続いた）の為、日系人は太平洋沿岸100マイル以内に入れず、ほとんどの日系人が日本へ強制送還か、収容所への移動・隔離となった歴史がある。移動への準備期間なく、「着の身着のまま」で移動させられている。さらに戦後は収容所を出ても、「日本への強制送還」かあるいはロッキー山脈以東への「カナダ東部へ追放」という、二つの選択のどちらかを18歳以上の日系人は余儀なくされた。1949年までは、バンクーバーやスティブストンのある BC 州に戻ることができなかったという歴史的背景がある。
- (31) Kobayashi, Cassandra. & Miki, Roy eds. 1989. *Spirit of Redress: Japanese Canadians in Conference*. JC Publications. p.102.
- (32) 山本剛郎『都市コミュニティとエスニシティー日系人コミュニティの発展と変容』ミネルヴァ書房, 1997年, 91頁。
- (33) 1995年7月, トロントで筆者インタビュー。
- (34) 拙著『カナダ日系社会の文化変容』2000年, 226頁。
- (35) ここでは、海外移住事業団の資料をそのまま紹介したが、この「カナダ系」というカテゴリーはかなり曖昧で、残念ながら理解しにくい。設問項目が不明瞭であったと考えられる。
- (36) プレトン (Breton 1990) の調査 (他3名) によると、メトロポリタン・トロントにおいて、多くのエスニック集団なかでも、ユダヤ系人口は1981年で全体の4% (日系は0.2%) というマイノリティであるが、三世のインターマリッジ率は19%で、非常に低い数値を示している。同じ調査メンバーのイサジフ (Isajiw 1990) は、ユダヤ系三世の回答者のうち66%がエスニック集団内で結婚することに義務的感情を保持していると指摘している。ユダヤ系の場合、族内婚がエスニック・アイデンティティを維持する重要な部分を占めていると考えられる。
- (37) 木村の調査によれば、日本からカナダへの新移民のなかで、女性の主要な移住動機として「結婚」がトップを占めている。移住時の平均年齢は28歳であり、既に

カナダに移住または居住している日系、あるいは日系以外の男性との結婚であると述べている（木村1997：88-89）。

- (38) Makabe, Tomoko. 1998. *The Canadian Sansei*. University of Toronto Press. pp.165-166.
- (39) Kobayashi, Cassandra. & Miki, Roy eds. 1989. *Spirit of Redress: Japanese Canadians in Conference*. JC Publications. p.103.
- (40) Ibid., p.105.

<引用文献>

- Breton, Raymond, Wsevolod W. Isajiw, Warren E. Kallback, and Jeffrey G. Reitz.
1990 *Ethnic Identity and Equality*. University of Toronto Press.
- Fugita, Stephen S. and O' Brien, David J.
1991 *Japanese American Ethnicity: The persistence of Community*.
University of Washington Press.
- Gordon, Milton M.
1964 *Assimilation in American Life*. Oxford University Press.
- Iino, Masako
1989 Japanese Americans in Contemporary American Society: a 'Success' Story? *Japanese Journal of American Studies*. 3: 115-140.
- Kikumura, Akemi and Kitano, Harry H. L.
1973 Interracial Marriage: A picture of the Japanese American, *Journal of Social Issues*, V. 29: 2.
- Kitano, Harry H. L.
1969 *Japanese American*. Prentice-Hall.
1976 *Race Relations*. Prentice-Hall.
1985 *Japanese American*. Prentice-Hall.
1989 Interracial Marriage Rate Jumps in Each Generation. *Asian Week*, March 24.
1993 "Marriage and the Future of Japanese Americans" *The Rafu Shimpo Ninetieth Anniversary Special Edition*. September 18.
- Kobayashi, Audrey
1989 *A Demographic Profile of Japanese Canadians: and Social Implications for the Future*. Department of the Secretary of State.
- Kobayashi, Cassandra. & Miki, Roy eds.
1989 *Spirit of Redress: Japanese Canadians in Conference*. JC Publications.
- Makabe, Tomoko
1998 *The Canadian Sansei*. University of Toronto Press.

Statistics Canada, 1996 Census.

海外移住事業団

1974『プリティッシュ・コロンビア州移住者動態調査』

木村真理子

1997『文化変容ストレスとソーシャルサポート—多文化社会カナダの日系女性たち』東海大学出版会

東元春男

1996「在米日系人のインターマリッジ」日本移民学会編『移民研究年報』第2号, 66-88頁.

飯野正子

1997『日系カナダ人の歴史』東京大学出版会

ナカノ, メイ・T (サイマル・アカデミー翻訳科訳)

1992『日系アメリカ女性——三世代の100年』サイマル出版会

高田光子

1991『遠き旅路の声——カナダ日系移民苦闘』朝日出版サービス

山田千香子

2000『カナダ日系社会の文化変容——「海を渡った日本の村」三世代の変遷』御茶の水書房

山本剛郎

1997『都市コミュニティとエスニシティー—日系コミュニティの発展と変容』ミネルヴァ書房